

ったために、作業継続のモチベーションが保てなかったり、家族と不必要な衝突を招き大きな癪癢を起こすことにつながったと考えられる。

今後、新たな対象者にホームワーク版を導入する際には、家族の協力が不可欠であることを十分に説明し、毎日少しの時間でも良いので、課題のチェックに取り組める協力体制を作って始めることが必要と思われる。

(b) 課題の導入

4－Aさんの場合には、ホームワーク版完成の時期が自立支援コースの期間と重なってしまったため、並行せざるを得なかったが、疲労感をもちやすい対象者にとって、自立支援コースを受講しながら課題を行うことは負担が大きかったと思われる。ホームワーク版には、家庭内での日課を創り出し、規則的でリズムのある生活スタイルを形成する等の目的が示されている。導入時期については、在宅期間中の方が負担感は少なく、こうした目的も達成しやすいのではないだろうか。また、4－Aさんの支援では間に合わなかったが、M-メモリーノート訓練における般化訓練と併せて実施できるようになれば、より一層効果が期待できるのではないかと思われる。

(c) 障害への気づき

受障後数年が経過し、ある程度日常生活で手伝い等もできるようになっていた対象者には、「食器洗い」は物足りなかった様子である。既にある程度できていた食器洗いを課題として取り上げたが、「できている」という感覚しか残っておらず、自分自身の障害について改めて気づくことにはつながりにくかった。

例えば、受障後間もない人であれば、食器洗い等の実務課題を選択し、長期間家庭で取り組んでももらいながら生活リズムの確立を図り、かつその様子を振り返ることで、障害認知にもつながっていく可能性は期待できるだろうが、4－Aさんのように受障後かなり年数を経過しており、障害認知も進み、日常生活もある程度自立できるようになった対象者には、「家計簿作成」のように、対象者自身が苦手としている分野の作業から導入する方が興味関心を持って、自分を振り返るきっかけにつながるのではないかと思われる。

その一方で、保護者は「食器洗い」において「改めてチェックしてみると食器がきちんと積み重ねられなかったり、並べられなかったりと空間認知が悪くなっていることが理解できた」と述べている。また、「家計簿作成」でも、費目の分類判断ができていなかったことが明らかとなり、「思っていた以上に判断力が落ちていることが分かった」と述べている。家庭で使用する目的で開発されたホームワーク版でも、職業評価場面のようにチェックシートを使ったり、評価基準がはっきりして客観的に評価できる内容なので、保護者の障害理解にはつながりやすいのではないかと思われる。

(d) 地域障害者職業センターの関わり

自立支援コース受講中は、毎日「食器洗い」チェックシートを提出してもらい、状況把握に努め、適宜相談を行った。修了後は1ヶ月に1回のペースで来所してもらい、課題の進捗状況の確認等を行っ

ている。

今回の試行で、主だった支援を家庭で行うにしても、進捗状況の確認だけでなく、いつまで続けるのか、次にどうするのか等日常生活を考えた調整・相談といったスーパーバイズは一定のペースで必要ことが分かった。ホームワーク版は、職業リハビリテーション・サービス待機者、生活リズムの改善が必要な者、家庭内自立を指向している者などを対象としているが、就労支援を開始するには早いと思われるこれらの対象者に対して、地域障害者職業センターだけで導入し、継続していけるのか、今後も検討が必要と思われる。

⑥今後に向けて

自立支援コース修了後、対象者は高次脳機能障害者の作業所へ通所中である。作業所内では対象者が使っている M・メモリーノートに着目し、他の通所生にも M・メモリーノートを導入し、日常の記録や週 1 回のグループミーティングで 1 週間の振り返りを行うために使用するようになっている。

数年前に開所した新しい作業所で、支援体制を整えているところだが、今回の対象者に実施したホームワーク版に関する取り組みにも関心を寄せ、可能であれば、作業所内での作業種目として取り入れていきたい意向を示している。考察でも述べたように、家庭での協力が得られにくかったり、地域障害者職業センターと継続的な関わりを維持できるのか、不透明な点もあることから、このような地域の作業所などに使い方を講習し、日常的に使用できる環境を整えて、家庭から職場へ移行する間のステップアップの場で活用する方法も考えられるのではないかとと思われる。今後は、家庭と地域障害者職業センター間の取り組みのみならず、作業所との連携も視野に入れ、さらなる活用方法を探っていく必要があると考えられた。

(イ) Yセンターの事例から

① Yセンターにおけるホームワーク版活用状況

ホームワーク版は、職業リハビリテーション・サービス待機者、生活リズムの改善が必要な者、家庭内自立を指向している者などを想定して開発されたものである。しかし、ホームワーク版は、職業リハビリテーション・サービスを受けている者に対しても、多様な目的での活用が望めるものと考えられたため、Yセンターでは、「職業準備支援」及び「リワーク支援」でホームワーク版を活用している。

「職業準備支援」では、①知的障害者でホームワーク版の課題の内容が本人にとって難しい、②就職先として、製造加工業などを希望しており、ホームワーク版の課題への動機付けが生じにくい、③同居している家族の養育能力が低い、などの理由で、利用の効果が望めない対象者が含まれていることから、Y 障害者職業センター（以下 Y センター）では障害者職業カウンセラーが効果が望めると判断した対象者に対し、ホームワーク版の実施を提案している。

一方、「リワーク支援」では、決められた課題をこなすことにより、自宅での生活リズムを整えることができること、ホームワーク版が復職に向けての自信の回復に役立つツールであることなどから、支

援利用者全員に、ホームワーク版の何らかの課題に取り組んでもらうこととしている。取り組む課題の選定は、本人の希望を考慮し、障害者職業カウンセラーとの面談を通じて行っている。

②事例 3 名の概要

Y センターでホームワーク版を活用した事例の中から 3 名の事例をあげる。事例 3 名に実施した支援の概要を表 2－18 に示す。

表 2－18 対象者の属性とホームワーク版等の実施状況

対象者名（概要）	課題名	宛名書き	健康管理 グラフ	家計簿作成	OAWork	MSFAS
4－B（20 代、男性、精神障害）				○	○	○
4－C（20 代、男性、知的障害）		○				
4－D（40 代、男性、高次脳機能障害）			○			

以下、各々の対象者の支援状況等について示す。

③対象者 4－B（20 代、男性、精神障害）

(a) 障害状況

- ・精神障害者保健福祉手帳は不所持。定期的な通院及び服薬により症状の安定が図られている。
- ・体力が低下しており易疲労性が窺える。
- ・失敗に対する不安が強く、新しい環境での緊張感が強い。

(b) 生活歴

- ・大学時に精神科初診。当時は悪口や噂されているとの気持ちが強く、自宅に引きこもっていた。
- ・大学卒業後は、公務員試験の勉強や翻訳のアルバイト（20 日間）、市役所の窓口業務（半日程度）、スーパーの商品の陳列（10 日間）などの就労経験あり。フルタイム就労は体力的に負担が大きく継続が困難であった。

(c) 取り組みの経過

Y センターの職業準備支援を約 3 ヶ月間利用した。事務職を希望していたため、事務職への適性の見極めと本人及び家族に障害特性について理解を深めてもらう目的でホームワーク版の OAWork 及び家計簿作成を実施した。課題の選定は難しい課題に取り組みたいとの本人、家族の希望を考慮して行った。

OAWork は、ワークトレーニング社内で主にセルフチェックモードで実施した。数値入力、文書入力、コピー＆ペースト、検索修正課題いずれも本人にとっては簡易な課題であったため、ほとんどミスなく全ての Level を次々にこなしていくことができた。

MSFAS は、ストレスや疲労とのつきあい方を考える目的で使用することを本人に伝え、職業準備支援の第 2 週目に、利用者用シート全てを、本人に記入してもらった。その結果、シート F のストレスや

疲労の生じる状況について、本人が自覚しているサインが少なかったため、評価アシスタントから見て疲労のサインと思われた事項について本人の自覚を促すことをめざした。また、疲れを感じた際の対応方法が「できる限り我慢する」というものであったため、ワークトレーニング社内では、疲労から作業効率が著しく低下するような場合には、休憩を申し出てよいことについて本人に伝えた。

家計簿作成課題は 2 日間、ワークトレーニング社内で実施し、作業手順の定着が図られていることを確認した後、家庭に持ち帰っての自学自習へと移行した。作業日は本人の希望により、月・水・金の週 3 回とした。Level1 はミスもなく、母親からも易しすぎるのではないかとコメントがあったため 2 ブロックで終了し、Level2 に移行したが、Level2 に取り組むようになってからは、残金等の転記ミスなど、毎回少しずつミスが生じたため、9 ブロックまで実施した。本人は完璧に仕上げたいとの気持ちを継続して持ち続けていたが、細かな箇所にも注意が行き届かない点は障害特性のひとつと推察されたため、作業終了後に確認作業を行うことを、補完行動として障害者職業カウンセラーから提案した。その後 Level3 まで実施したが、補完行動の定着が図れたためか、実施した 2 ブロックはミスがなく、本人としても自信を得た形で課題を終えた。

対象者は現在、軽作業でパートタイム就労に従事しており、ホームワーク版の活用はしていないが、Excel で独自の家計簿作成を継続している。当初、対象者の作業を確認する母親が負担を感じるのではないかと懸念があったが、対象者が自身で採点作業を行った後に母親に見せる形であったため、母親は確認作業に対して大きな負担は感じていないようであった。しかし、障害者職業カウンセラーと母親とのやりとりは、ホームワーク版実施中、数回程度であったため、母親が、対象者の障害特性を十分に理解するまでには到ることができなかったように思われた。就労の継続に際して、家族に支援者としての役割を担ってもらうためには、家族にも、本人の障害に対して理解を深めてもらう必要があるため、本人のみならず、家族に対しても、障害特性から生じる課題、それに対応した補完手段の効果を、丁寧に説明していくことが必要と思われ、今後の課題となった。

④対象者 4－C（20 代、男性、知的障害）

（a）障害状況

- ・療育手帳（B）を保持。受け答えはしっかりとしており、一見、障害を感じさせない。
- ・作業量が増えた際には焦りからミスを生じやすく、複数工程について同時に指示を受けると理解力が低下する。

（b）生活歴

- ・一般高校卒業後、専門学校を修了。一般扱いで就労を多数経験。介護職や清掃員などで、短期間での解雇を何度か経験したことで、不器用さ、指示理解の悪さを自覚し、自信を無くしている。
- ・職業準備支援を利用中に、療育手帳を取得。

(c) 取り組みの経過

Y センターの職業準備支援を約 4 ヶ月間利用した。簡易な事務作業への適性の把握と、家族の対象者に対する障害特性の理解を深めることを目的にホームワーク版の宛名書き課題を Level3 まで実施した。課題の選定にあたっては、本人に適した課題を障害者職業カウンセラーから本人及び家族に提案し、了承を得た上で取り組みを開始した。仕様書を自分で読み、手順を理解する力が十分ではなく、日数が経過すると理解の保持があいまいになる対象者であったため、Y センター内で課題に取り組む期間を 1 週間程度設けたのちに自宅での自学自習へと移行を図った。

作業導入当初、対象者から障害者職業カウンセラーに対して、進捗の確認をしてほしいとの申し出が頻繁に見られ、作業に対しての意欲が強く感じられた。しかし、当初、父親がコメントを書いていたが、定型のコメントがほとんどで、後半になると、忙しさが増したため、そのコメントさえ、もらえなくなったこともあってか、後半は意欲が減退したようにも感じられた。作業ぶりは「様」の書き忘れや字体の誤りなどのミスが多く、手本どおりに仕上げることを障害者職業カウンセラーから何度となく指摘するも、定着を図ることは難しかったが、本人としては取り組みを通じて、字が上手になったとの達成感を得て、課題を終えた。

⑤対象者 4－D（40 代、男性、高次脳機能障害）

(a) 障害状況

- ・伝えたい言葉をすぐに思い出せないことがあるが、日常の雑談程度の会話への対応は可能。
- ・指示内容が複数工程になると理解力の低下が見られる。
- ・自分に障害があることは理解しているが、具体的にどのような障害を有しているか理解できていない面がある。

(b) 生活歴

- ・大学卒業後、製造関係の企業に入社。
- ・平成 14 年に管理職として勤務中にくも膜下出血を発症。3 年間の休職期間を経て職場復帰し、現在は就業中。

(c) 取り組みの経過

Y センターのリワーク支援を 4 ヶ月間利用した。簡易な作業に取り組むことにより自信の回復を図ること、健康の自己管理について意識してもらうことを目的にホームワーク版の健康管理グラフ作成を実施。Level1 は Y センター内で実施し、その後は自宅に持ち帰り自学自習を進めてもらった。Y センター内での作業時には、対象者にとって、仕様書だけでは理解が難しい箇所について、ポイントをしばって記した手順書を用いた方が手順の理解がスムーズとなること、また問題用紙にチェックをつけながら作業を進めると確かさが増すことなど、自分自身の障害や補完手段について理解を深めることができた。

自宅では妻が毎日確認作業を行い、コメントを書いたことが本人にとっては励みとなったこと

もあり、Level5 まで順調に作業を進め、終了となった。

本人にとって、課題は簡易な内容であったが、レベルが上昇し難易度が増してもほとんどミスなく作業を進められたこと、徐々に作業時間の短縮が図れたこと、課題の実施から結果の自己採点まで自分で次々に行うことができ、自分自身で管理しながら進めているという実感を得ることができたことは、職場復帰にあたっても、自信回復の要因のひとつとなったようであった。

⑥まとめ

事例での取り組みを通じ、ホームワーク版の効果と、Y センターにおける活用上の課題について整理する。

(a) ホームワーク版の活用の効果

【障害理解の促し】

事例 4－B や 4－C のように、正確な作業遂行に課題が把握される対象者については、ホームワーク版へ取り組む中でも、同様の課題が浮き彫りとなることが多い。勿田他（2004）によれば、障害者の職業生活を支えるためには、事業所の理解や専門家によるサービスだけでなく、家族が継続した支援を行える支援者としての機能を果たすことが必要であることが指摘されているが、ホームワーク版は、実施者にとっての課題を、本人や家族に伝える契機としての活用が期待できるツールであると思われる。

【自尊心の回復】

リワーク支援の対象者がホームワーク版を活用する場合、課題の難易度は対象者にとって無理なく取り組める程度のものと言える。したがって、事例 4－D のように、ほとんど誤りなく作業を遂行できることや時間の短縮が徐々に図られることによって、対象者の自尊心の回復にあたっての一助となりうるものと考えられる。

【作業終了後の般化】

事例 4－B においては、家計簿作成課題を通じて、家計簿を作成することの楽しさについての認識を高め、ホームワーク版の取り組みを終了した後、自ら Excel にて家計簿をつけるという習慣が身についた。また、事例 4－D においても、健康管理グラフ作成課題に従事したことを機に、健康管理の重要性についての発言が対象者から見られ、自身の健康に目を向ける契機となったことが窺われた。以上のことから、ホームワーク版は、対象者に適した課題を選択することで、終了後に適切な行動の習慣化が期待できるものと推察される。

【本人と家族の関係性の変化】

事例 4－D では、家族で課題に取り組んだことによって、他の家族との関係性に変化が生じていた。例えば、対象者は作業終了後に、毎日、妻に確認作業をしてもらっていたが、そのことにより夫婦間のコミュニケーション場面が定期的に確保され、家族が支援者としての役割を果たすための基盤を構築する上での一助となっていた。また、健康管理グラフは家族の健康指標を記録するという内容となってい

るため、対象者自身、自分の家族へ思いが及ぶことがあったようである。また、外見からはわかりにくい障害であったことから、子供が対象者に対し、自宅を取り立てて何もせずにじっとしている父親というイメージを持ち、反発することもあったが、ホームワーク版を自宅で実施することで、頑張っている父親の姿を見た子供の態度に変化が表れるなどの効果も見られた。以上のことから、ホームワーク版を活用することで、実施者本人と家族との関係性を良好にする効果が期待できるものと推察される。

【ホームワーク版活用目的の多様性】

ホームワーク版の実施目的は、対象者の状況によって、多様に想定可能と推察される。Y センターにおいては、上述したように、対象者や家族の障害理解の促進や、自尊心の回復、終了後の般化を目指すなどの目的で使用している。

ホームワーク版の特徴のひとつに、課題実施者本人と支援者（家族等）によって、実施～採点・評価までを行えるような配慮がなされていることがあげられる。例えば、本人用と支援者用の仕様書の準備がなされていることや、健康管理グラフ課題であれば、健康指標（体重・万歩計の歩数・血圧・脈拍）のデータを保持している家族の各構成員が、具体的なストーリー設定のもと構成されており、課題への親しみを保ち易いような工夫がなされていることがその例である。そのため、いずれの事例においても、課題の導入にあたって利用者が抵抗感を抱くことはなく、スムーズな取り組みがなされた。事例 2 の対象者など、マニュアルを自分で読み理解する力を十分に有していない対象者であっても、自学自習に移行する前に、支援者の下で手順の定着を確認することで、スムーズな自学自習へと移行できた。以上のことから、ホームワーク版は多様な目的で、スムーズに導入が望めるツールと考えられる。

Y センターにおいては現在の所、全ての利用者について、職員の支援の下、課題に取り組んでもらう期間を設けた後、自宅に取り組んでもらうこととしている。位上（2005）によれば、ホームワーク版の活用にあたっては、家族と地域センターのみならず、作業所等の関係機関との連携により、ツールの活用可能性が広がるのではないかと指摘されていることから、今後は、関係機関との連携により、導入時に必要な支援を、関係機関に実施してもらう方法も導入したいと考える。

（b）ホームワーク版実施の課題

ホームワーク版の導入が本人や家族の障害理解の契機となりうることについて上述した。しかし、事例 4－B においては、障害者職業カウンセラーがやりとりをしたのは主に本人のみであり、母親に対しては、作業の状況について十分な情報提供を行うことができなかった。したがって、母親は、誤りの原因は本人の単なる注意ミスであり、真剣に取り組めば改善が図れるものとの認識が強く、複数工程をこなすと誤りが生じやすいなどの対象者の障害特性について十分に理解を深めることができなかった。家族に、本人の障害特性について十分に理解してもらうためには、支援者と家族とが定期的なコミュニケーションの機会を確保することが必須と思われ、自己評価用紙を通じたやりとりだけでは十分でない場合には、電話で頻繁に連絡を取りあうなどの方法について検討する必要があるものと思われる。

また、今回、ホームワーク版の実施にあたっては、事前に医療機関に課題内容を提示した上での実施

等を行わなかった。しかし、自宅で作業を行うことにより利用者には負荷がかかること、また、利用者を傍らで見る家族が不安を覚えることも考えられることから、負荷とどうつきあっていくかについて、医療機関から情報提供を依頼するなど、連携の下で取り組んでもらう必要があるものと思われる。

⑦結語

Y センターにおいて、平成 17 年度にホームワーク版を活用した事例についての状況を踏まえ、効果と今後の取り組みの課題について検討した。Y センターにおけるホームワーク版の活用は、一定の効果をあげていると言えるが、実施した事例は決して多くないのが現状である。また、家族支援を念頭においた場合、対象者の状況のみならず、家庭の状況によっても実施方法上の配慮や効果が異なるものと推察されるが、今回の報告では、その点において十分な考察を深めることができなかったと言える。今後もし引き続き、取り組みを継続する中で、本稿における検討を更に深めていきたいと考える。

《引用文献・参考文献》

- 刎田文記他（2004）．「事業主、家族との連携による職業リハビリテーション技法に関する総合的研究」の枠組 第 12 回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.11-12
- 位上典子他（2005）．地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について 第 13 回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.112-115
- 石原まほろ他（2006）．地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用 第 14 回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.232-235
- 岩崎容子他（2004）．トータルパッケージホームワーク版の開発 MWS ホームワーク版-事務課題- 第 12 回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.13-16
- 木村彰孝他（2005）．養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望 第 13 回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.208-211
- 小池磨美他（2005）．発達障害者に対するトータルパッケージの活用 第 13 回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.200-203
- 障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 NO.58 高次脳機能障害を有する者の就業のための家族支援のあり方に関する研究